語版ではこれを6巻にまとめた形で出版される．この英語版6巻の中では約360属1650種の植物について分布図と形態学的特徴の検索キー，植物に関する補足説明が記載され，ロシア語版では記載されなかった新しい種や組合せなども含まれている．ロシア北極地方とはノルウエー国境からベーリング海峡までの経度にして実に160度の広範囲であり，「Flora of Russian Arctic」はこの地域に生育する植物をカバーした比較的新しい植物誌である．これが英語版になり読みやすくなったことは歓迎すべきことだ． （近藤健児）

□白岩卓巳：**絶滅危惧植物，水生シダは生きる**．254 pp．2000．自費出版．¥4,000（送料共）．

サンショウモ，オオアカウキクサ，デンジソウ，ミズニラ，ミズワラビと章を分けて，理科教員の勤務のかたわら積み重ねた，著者の永年にわたる観察，研究をまとめたものである．それぞれの章の先頭には，15～19頁にわたってカラー写真による生態，部分，解剖，顕微鏡写真などが提示され，本文中にもたくさんの図が用いられている．内容はそれぞれの種の生活誌を主軸としたもので，確認された結果ばかりでなく，それ以上に疑問点，今後究明されるべき問題点がたくさん述べられている．

表題には「絶滅危惧種」という文字が使われており，これはもちろん読者を引きつける要素ではあるが，私はそんな文字はなくても，生活誌の記録あるいは研究法として，十分おすすめする価値があると思う．動物とくに昆虫では，その生活誌が詳細に研究され，それが主流の一つとなっているが，高等植物ではどういうわけか種の記述のみでよしとされる傾向があり，一種々々の生活をねばり強く追いかける風潮は希薄である．ひと頃盛んになりかけたフェノロジーも，今は目立たなくなってしまった．しかしながら植物の生き方はそれ一種だけで成り立つものではなく，ライフサイクルのどこでどんなことが起こっているかを知ることは，他の生物を含めた自然の仕組みを明らかにする上で大切なことである．

たとえばミズニラの幼体が浮遊しているのを見ただけでは，つい見過ごしてしまうが，経験深い目からは，それが繁殖行動の一つであり得ると考えたり，デンジソウの胞子嚢果の発芽の仕方が，文献の記述と合致しないというようなことは，実際にモノをたくさん観察していないと気づかない．観察の必要性を大いに認識させる．観察記というと，何があったとか花が咲いたとか，利用とか保護とかに偏りがちだが，ある植物の器官や部分の形や行動を丹念に記録して行くという行き方が，もっとあってほしい．これにはアマチュアの人達の活躍が期待される．専門研究者は，流行のトピックを追わないと，研究費がとりにくいとか周囲からの評価が下がるとかいうジレンマをかかえている．各地の同好会誌に発表されるそういう断片的な報文が集積されれば，いつかは種族誌を編む大事な要素になるだろう．そのためには「こんなことは判っている」とボツにしないで，同じような結果でも繰り返し発表させる方がよい．同じと思っていた植物の行動にも，地域による差があったり，中には同じ種と思っていたのが複合種で，その違いが現れたりしないとは限らないのだ．そういう観察眼をもつ人が増えれば，日本の植物自然誌の内容は，一層豊かになるだろう．

本書が出版社の企画にのらなかったことはもったいないはなしである．もっとも，出版社の仕事だったら，こんなにふんだんにプレートを使うことはできなかったろう．でも原色図鑑を続々と刊行するのだから，この次は種族誌にも目を向けてほしいものだ．購入についての連絡先は次のとおり．〒657-[redacted] 神戸市灘区[redacted]（Tel/Fax [redacted]）白岩卓巳． （金井弘夫）

□岡　国夫（原資料）・山口県植物研究会（編）：**山口県の巨樹資料，植物調査の歩み** 236 pp．2000．山口県植物研究会．¥1,800（+送料¥310）．

1998年に亡くなられた岡　国夫氏の残された資料を元にしたもので，二部から成る．I は山口県の巨樹資料で，岡氏の記録に他の調査結果を加え，場所，周囲長，記録年月，記録者のデータが分類順に配列されている．II